

梶原正昭校注『陸奥話記』

鈴木 則 郎

『将門記』と『陸奥話記』とを初期軍記として一括し、中世軍記物の先駆的な作品として位置づける見解は、すでに定着しているといつてよいであろう。しかし、それらの作品がどのような点で中世軍記物の先駆的作品であり得るのかという問題は、依然として十分に解明されたとはいえないのではないであろうか。というのも、この問題の解明のためには初期軍記の文献的・書誌的な研究成果に基づき、多様な視点からそれぞれの作品の特質を究明するという作業が不可欠の条件となるからである。

このような問題意識をもってこれまでの初期軍記個々の研究成果をみるとき、『将門記』と比較して『陸奥話記』のそれがかなり見劣りするのは否めない事実であろう。なぜ『陸奥話記』の研究が立ちおくれたのかの理由は決して単純ではないと思われるけれども、評者自身の経験をも勘案してみるなら、その最大の理由は『陸奥話記』に関する基礎的な研究、諸本の問題をはじめとして本文批評や訓詁注釈というような正確な読み込みの前提となる基礎的研究が立ちおくいていたからにはかなるまい。

したがって、『陸奥話記』研究史上の観点からすれば、笠榮治

氏の『陸奥話記校本とその研究』（桜楓社 昭和41）ならびに大曾根章介氏校注の『陸奥話記』（日本思想大系8『古代政治社会思想』所収 岩波書店 昭和54）の刊行は、それぞれに研究者にとつてまことに貴重であったといわなければならない。特に前者は『陸奥話記』の諸本の問題に先鞭を着け、本文の問題に一応の結着をつけたという意味において画期的な業績であったといつてよいと思う。たとえば、『陸奥話記』の成立事情にかかわる卷末の有名な文章「今抄『国解之文』拾『衆口之話』注三之一卷云々」の「国解之文」と「衆口之話」との関係の問題にしても、群書類従本をはじめとする他本には傍点を付した「拾」が「於」となっているため、「於」の訓み方をめぐって諸説があったのは周知の事実であろう。この点に関し、笠氏が綿密な諸伝本の対校の結果を踏まえて群書類従本よりも書写年時の古い伝本には「於」が「拾」となっていると指摘したのは、氏の業績中の注目すべき一例といえよう。なぜなら、これは単に本文校訂の問題にとどまらず、『陸奥話記』の成立事情を明確化する結果にもなったからである。

しかし、『陸奥話記』の正確な読み込み、内容の深い理解をさまたげるのは、実はテキストクリティックの問題だけではない。『陸奥話記』は前九年の役という歴史的事件を素材としたかなり記録性の強い作品であるところから、その表現内容を深く理解するためには史実との関係、登場人物の出自ないし経歴、古代の地名などが解明されなければならず、それは史料の限界もあってはなはだ困難な作業であるからである。しかし、『陸奥話記』の記述内容がいったいどこまで事実であるのか、あるいは記述内容の意味

するものは何であるのかを究明することは、『陸奥話記』の虚構性、物語性を明らかにする上で不可欠の観点であるのは確かである。また、登場人物や登場人物相互の関係、戦闘の拡大に依拠して頻出する地名についての知識なしに『陸奥話記』の真の理解があり得ないのはいくまでもあるまい。『陸奥話記』の記述内容を正確に把握する上からもう一つ重要なのは、漢籍との関係という視点であろう。いわゆる表現の典拠の問題である。『陸奥話記』の表記法は漢文体であるところから、表現が漢籍中の語句・成句によっている場合が多く見出され、したがって、『陸奥話記』の正確な読みのためには漢籍との関係という問題も決してゆるがせにできないのである。このように『陸奥話記』の読みの困難さを考えてみると、今回の梶原正昭氏校注『陸奥話記』の刊行は、『陸奥話記』の基礎的研究を前進させ、その本質論的な把握を促進する役割を果たすという意味において、研究史上まことに重要な意義をもつといえるであろう。

本書は、国立国会図書館所蔵の『陸奥話記』（明和七年庚寅三月廿四日、伊勢貞丈書写本）を底本とし、他本との綿密な対校の結果を踏まえて本文を定め、訓み下し文を付し、これに詳細な頭注・補注を施したものである。さらに『陸奥話記』典語故事一覧・関係史料・参考資料を網羅し、最後に解説を加えている。本書の構成は大略右の通りであるが、念のため次に「目次」を掲げておく。

凡例

陸奥話記（原文・訓み下し文・頭注）

補注

校異

典語故事一覧

史料

資料

解説

年表・系図・地図

さて、本書の特色はなんといっても頭注・補注・典語故事一覧に最もよくうかがわれるのではないかと思う。なかでも補注は正巻である。『陸奥話記』の記述内容の問題点一つ一つについて諸史料を博搜され、歴史家の見解にくまなく目を配っての詳細な注解は全くみごとである。そこで、以下補注を中心に本書の特色を具体的に考えてみたい。

まず、前九年の役の直接的な原因となった「阿久利川事件」の場合を例にあげてみよう。この事件の原因や経過については不審な点がすくぶる多く、歴史家の見解もわかれていたのが注目される。梶原氏が「補注二六」でこの事件を取り上げ詳しい説明を加えておられる。氏は、頼義が国司として着任して以来五年間も恭順の姿勢をとり続け、鎮守府視察に際しても厚遇してやまなかった安倍氏が、頼義の帰洛を目前にしてなにゆえにその態度を豹変させ、頼義を攻撃しなければならなかったか疑問であること、事件の首謀者が貞任らしいという権守藤原説貞の子光貞の言をそのまま受け入れ、事件の真相を糾明もせずに貞任を犯人と断定し、性急に処罰しようとする頼義の態度も不審であること、夜間に何

者がかひそかに頼義に密告したのが事件の発端となっているが、その人物が不明である上、なぜ攻撃された光貞・元貞らが直接頼義に訴えなかったのかも疑問であること、また、事件の描き方をみると、安倍氏側が終始受け身で頼義側が強引に事を進めた印象が強いことなどの疑問点を指摘した上で、真相はむしろ逆であり、この事件は頼義側から企てられた謀略ではなかったかとの氏自身の見方を示す。氏の疑義が妥当性をもつのは確かであろう。

次いでこの事件に対する歴史家の見解が次々に紹介される。「補注二六」に関しては、三宅長兵衛・竹内理三兩氏の頼義側による安倍氏挑発説、新野直吉・庄司浩兩氏の在庁官人藤原説貞一族による安倍氏挑発説の紹介がそれである。梶原氏は両説を併記して紹介するという客観的な方法をとるが、それにもかかわらず、これが氏自身の見方を検証する結果となるとともに、また読者の判断の拠りどころもなっており、この事件の記述内容の解釈の仕方をおのずと示唆するのは否定できないところである。問題の所在を明らかにしながらも自説を強制せず、判断の材料を客観的に提示して記述内容の正確な把握へと導いていく配慮は、基礎的研究としての本書の性格からすれば適切であり、賞賛に値するであらう。

地名や人名を明らかにする氏の態度もまた厳正である。次に、地名に関する補注の場合を取り上げてみよう。「補注一〇〇」は「厨川・姫戸の二柵」の場所をめぐる解説である。梶原氏は「厨川の柵は、貞任の城柵で安倍氏の本拠とされていた要衝であるが、その所在地については諸説があり、確定しがたい。」と述べ

た上で、最初に資料の面からその所在地を究明する方法をとる。

氏の調査によれば、『奥羽観跡聞老志』・『平泉名勝記』・『岩手県史』などでは、古くから「安倍館」と呼ばれていた「盛岡市街の東北の下厨川で北上川と面する台地」をこれに当て、『大日本地名辞書』では「これよりも南、北上川・雫石川の合流点に近い盛岡市厨川里館付近」を想定しているとして両説を併記し、ここでも先の「補注二六」でみたと同様の客観的な記述態度を示している。そして、さらに岡部精一氏の「厨川というのは雫石川の古名で、その合流点は現在場所よりもやや東に寄っていたらしい」という説を紹介するのであるが、注目すべきは、氏が右の諸説を踏まえて『陸奥話記』の記述に該当する場所を実地調査によって確定しようと試みたことである。『陸奥話記』の叙述に該当するような地形は、この付近一帯には見当たらない。」という言葉は、それははっきりと物語る。一般に調査が困難で確定しがたい古代の地名を資料の面から吟味するだけではなく、現地に足を運んで諸説を確認した氏の研究者としての真摯な態度は、高く評価されて然るべきであらう。

補注について語るべきことは多いが紙面の都合もあるので、特に興味深い指摘と思われる二つに限定して簡単に紹介しておきたい。一つは「補注九七」で、これは頼義と清原武則との間の呼称の変化を指摘したものである。すなわち、それまで頼義は武則を「子」と呼んでいたのに、武則の参戦によって官軍が攻勢に転じる場面に至ると「卿」という呼称に変化する一方、武則の頼義に対する呼称も「將軍」から「足下」に変わっているという指摘な

のである。梶原氏も「こうした互いの呼び方の変化は、この争乱鎮定の過程における頼義と武則の連携のありかたと、その人間関係の微妙な経緯を示すものとして注目される。」とその重要性を主張しておられるが、これは作品論の立場から『陸奥話記』の世界を考える上でまことに重大な指摘であると思う。なぜなら、『陸奥話記』の主人公は形式的には頼義であろうが、すくなくとも後半の世界に関する限り、実質的な主役は武則であることを示唆するからである。『陸奥話記』の世界は武則の参戦を契機として新たな展開をみせるのであり、しかも、それ以後の世界を主導する人物は、頼義ではなく武則であるという作品のあり方とこの呼称の変化の問題とは密接に関連しているのではなからうかと考えるのである。

さらに、「補注六一」の指摘も後代の軍記物との関係という観点からきわめて興味深いと思う。『陸奥話記』中には、頼義が戦没したと思ひ込んだ頼義腹心の部下、藤原茂頼なる者が、僧形となって戦場に赴き、頼義の遺骸を求めて供養しようとした話があり、そこに「兵革所衝自非僧侶不能入求」という文章がみえる。つまり、僧形であれば戦場に自由に入出入りできたわけで、梶原氏はこれを『太平記』巻十五「將軍都落事」における楠正成の奇計とも関連づけ、その「先驅をなすもの」として注目しているのである。「將軍都落事」には、たしかに正成が戦場に二、三十人の僧を入れて死骸を求めさせ、新田・楠以下の諸将が討死したとして敵をあざむき、敗走させた奇計が語られているから、右の氏の指摘は『陸奥話記』と後代の軍記物との関連性に具体的に触

れたものとして注目されなければならないであろう。なぜなら、初期軍記と後代の軍記物との関連性の問題は、多様な視点からもっと究明されるべきであると考えらるからである。ちなみに、『陸奥話記』と『太平記』との間に梶原氏の指摘されるような関連性があるのとは認めるとして、二つの作品を読みくらべてみると、関連性があるのではないかと思われる記述や場面がいくつか見出せる。一例をあげると、『陸奥話記』の厨川の櫓攻略の場面の「遠者発」弩射之近者投石打之之適到「柵下」者建沸湯沃之云々」という記述と、長文にわたるので引用はさしひかえるが、『太平記』巻三「赤坂城軍事」における正成が熱湯を注ぎかけて寄手を悩ましたという場面の記述との間には、かなり強い類似性が認められるのではあるまいか。ただし、初期軍記と後代の軍記物との間の関連性を具体的に指摘するのは、なかなか難しい作業であり、慎重でなければならぬ。

以上、補注を中心に本書が『陸奥話記』の基礎的な研究書あるいはテキストとしていかに卓越したものであるかをみてきたが、典故によった『陸奥話記』本文中の語句および成句の典拠や原拠を明らかにした典語故事一覧も貴重である。それは『陸奥話記』の記述内容を深く理解するために不可欠であるのみならず、『陸奥話記』の研究分野に新しい視野を開くものでもあるからである。『陸奥話記』が漢籍の影響下に成った作品であるのは確かであるから、当然日中比較文学研究の対象となり得るわけで、とすれば、典語故事一覧はそのための基礎的研究の役割をも果たすことになるであろう。

本書の特色や意義を十分に説明できないまま、いたずらに指定の紙数を費してしまい自責の念にたえないが、『陸奥語記』に大きな関心をもつ者の一人として、本書のような周到な基礎的研究書が刊行されたのを喜ばずにはいられない。まさに待望のテキストの出現といってよいであろう。そのような気持がいくらかでも表せたとしたら望外の喜びである。最後に、著者に対しては本書に示されたすぐれた研究成果を踏まえて、今後、『陸奥語記』の

新刊紹介

中野幸一・春田裕之著

『伊勢物語全釈』

本書は学習院大学蔵三条西家旧蔵本を底本とし、主として初学者向けに伊勢物語の読解を試みたものである。内容はまず上下に本文と「通釈」を対照させ、ついで「語釈」と「補注」の欄で文法・語義・歴史的事項に亘る詳細な説明が施されている。冒頭の解説からも窺えるように、主観を排しオーソドックスに徹した姿勢が本書の特色のひとつといえようが、未解決の問題が山積され、自説の主張に駆られやすい伊勢物語であればこそ、むしろ得難い堅実さというべきだろう。

なお各所に奈良絵本（九曜文庫蔵）から

本質論、作品としての文芸的な意味の究明や文芸史の位置づけの問題等にも関心を向けられることを望みたい。もっとも、それは本書の刊行により著者が我々に与えた課題でもあらうから、我々こそ本書をしっかり受けとめなければならぬと思う。（昭和五七年一月一〇日 現代思潮社・古典文庫 B6判 三五一頁 二八〇〇円）

の写真版が挿入され、楽しめる。他文献にみえる重載歌・類歌が挙げられ、異本所収の十九章段にも訳注を付けるなど、研究者が利用しても便利な一冊である。（昭58・7 武蔵野書院 B6判 二六七頁 一三〇〇円）

〔深町健一郎〕

柴田光彦編著

『大惣蔵書目録と研究 索引篇』

貸本屋大野屋惣兵衛旧蔵書目録

昨年三月に刊行された「本文篇」の姉妹編で、「本文篇」掲出の書名を五十音順に配列した索引が、本書の中心をなしている。索引中、国会図書館蔵『胡月堂蔵書目録』所出の書名には△印が付され、さらに、『胡月堂書目』にあるが、本文中にない書名が、巻末に掲載されている。不完全書名は（ ）で補い、難訓書名は、音読ないしは音訓両

様を掲げる等の、良心的な配慮がなされている。本書刊行の意義については、既に、昨年六月二十七日「朝日新聞」読書欄で、百目鬼恭三郎氏が論じられているので、ここでは繰り返さない。二十数年間、刊行の待たれた「大惣蔵書目録」の本文・索引の両者が、ここに完備した事は、まことに慶賀すべきであらう。（昭58・8 青葉堂書店 B5判 三四頁 一五〇〇〇円）

〔中嶋隆〕

栗山理一・陣峻康隆
丸山一彦・松尾靖秋 校注・訳

『蕪村集 一茶集』

（元訳 日本古典58）

古典俳文学大系の『蕪村集』（昭四七）・『一茶集』（昭四五）により基礎的考証が成された蕪村・一茶研究は、芭蕉研究に比して大きく立ち遅れ、発展途上の観を呈して